

災害と人権

生きとし生けるもの全てのいのちの幸せを願い、はたらき続けてくださる阿弥陀さまとの出会いによって、全てのいのちの幸せを願うなど思いもよらなかった私の心に、小さな痛みが生まれました。

それは、自分の幸せに精一杯で、他人の悲しみに思いが至らなかった私自身への痛み。そして気が付けば、悲しみを抱えたたくさんのいのちがそこにあったという事実への痛み。

その痛みを出発点として、その悲しみに寄り添いたいと願っても、自分中心の心を離れられない私であることを何度も思い知らされる。

阿弥陀さまとの出会いによって与えられるのは、きっと答えではなく「問い」。それは自らへの問いであり、社会へ向けた問い。

そして、それを考え続ける力と、ものごとの本質を見抜く感性と、一步を踏み出す勇気も一緒に与えられる。

限界を抱えた私たちだけど、無限のはたらきに支えられ、促されて生きている、あなたと私であることを……伝えたい、あなたに。

不用意な言葉や態度の中で
我慢を強いられている方々がいることを
考えてみませんか？



浄土真宗本願寺派 社会部 人権問題担当

〒600-8501 京都府京都市下京区堀川通花屋町下ル

浄土真宗本願寺派宗務所内

TEL075-371-5181 (代) FAX075-351-4139

「思ったより元気そう」

「かわいそう」

「ガンバレ」

「前向きに生きよう」

「命があったんだからよかったと思わなきゃ」

「早く元気になって」

「あなたは幸せなほうだよ」

「つらいのはあなただけじゃない」

「もっと強く生きなきゃ」

あなたの痛みに
気づける私であるために



災害は突然やってきます。そしてその時から「被災者」という存在が突然生じてしまいます。

災害後「被災者」に対して向けられる「ガンバレ」や「負けるな」という言葉。それによって励まされたり元気づけられることもあるかもしれませんが、言い続けられると次第に重荷に変わっていくことがあります。

災害で傷つきながら、さらに不用意に発せられる慰めや励ましの言葉や態度によって傷つき、我慢を強いられている方々が、たくさんいらっしゃるのです。

たとえ善意であり、何とかしたいという素直な気持ちであったとしても、自分の言葉や態度が誰かを傷つけていないか、問い続けることも大切です。